

事を論ずるのはたしかにいふことである。併しながら「注文がある。専門家よ、結論を急ぐ勿れ。」

「留唐外史」は私には一つの諷刺物語だった。題材は弱志薄行の一留學僧の話に過ぎないが讀む人間の器に應じてこの物語からは色々な諷刺を引き出すことが出来る。この諷刺小説は題材がほんとの事實であつたといふ點でいかなる小説家も持ち得なかつた所のいひ知れぬ強味を持つてゐる。歴史家の武器をこゝんなに有効に利用した人はさう澤山はあるまい。

「巴里にて刊行せられたる北京版の日本小説其の他」先生自身はそんな深い魂膽があつて書たのではないといはれるかも知れないが考へて見ればこれはすむ分人を食つた話である。さすがの私も先生の大胆さにはいさゝか驚いた。歴史家の武器もかうなると少々藥が利きすぎる。

明快を以て特長とする先生のお話の中で「雷を天神といふこと」の一篇だけはどうも私にはすつきりと話の筋が一度讀んだだけでは呑み込みかねた。この話の一體どこが眼目なのか。

支那では天神の名が失せて、雷の信仰が稍形を變へ乍らも今に繼續し、日本では天神の名だけが残つて、雷の信仰は殆んど廢れて了つてゐる。只兩方の根源を段々辿つて行くと、どうやら一つのものに歸着するらしいのである。

どいふのが結論らしいのだがこれだけでは先生の結論としては餘りに平凡過ぎる。だが民族學とは一體何をする學問なのかも知らない私にとかやくいふ資格はない。(内藤戊申)

支那繪畫史研究

下 店 靜 市 著

近刊、下店靜市「支那繪畫史研究」は本文四七〇頁、圖版アト紙一〇五葉、原色版四葉。その體裁からみて今日の單行本としてすこぶる惠まれた出版である。

この書物は十一の論文から成つてゐて、大體、支那繪畫史を古代から近世まで通覽しつゝ、時代を追つて叙述をすゝめる體裁であるやうに思はれる。しかし著者は本書を支那繪畫史概説と呼ばず、支那繪畫史研究と呼んでゐるので、讀者はまづ本書に概説以上の細部的な論説や又は批判的な言説の多分に包藏せられてあることを豫想してよい。著者は「序に代へて」のなかで彼の意圖するものを次のごとく述べてゐる。

「此の研究に手を染めて以來早くも二十年に近い歲月が夢のやうに流れた。……支那畫と日本畫との史的關係は密接であり、その研究は決して一方的であり得ない。本書は元來私の大和繪畫研究がその端緒で、大和繪畫研究が進むにつれて豁然として開けたのが支那畫の世界なのであつた。……新しい立脚地、新しい方法等はその間に次第にまともつて來た。廻り道をしたが、退いてみたり、やり直しをする事は進出を阻害したが、それらはしばしば此の學問が若すぎるためでもあつたとおもふ。このやうにしてその本流を究め、本質を明らかにし、新しい體系を樹立するに意をそゝいだ。古代人の心に立返つてこれを見直す、考直す事は當然な態度でありながら怠られ勝ちであり廣

汎な視野が必要であり、総合的な判断が要請される。

支那繪畫史を貫く特異な性格は山水畫にある。世界無比の大藝術……往々にして佛畫のみが宗教畫と考へられたが、支那に於ける佛畫の位置は、少くとも史的にはあまり大なる價值を見出し難かつた。高々唐時代のみに忽然と咲き出で、間もなく消え失せたものであつた。……山水畫は悠遠數千年、この民族の心に、この廣漠たる自然を背景として、深く湧き出でた信仰を母胎として發生した藝術であつた。……これこそこの民族が有つ唯一の宗教畫である。」

大和繪研究から支那畫の研究に入つたといふ告白に對して、五、繪因果經樣式試論が答へを提供し、古代人の心に立返つて繪畫史を見直すといふ主張に對しては、一、支那山水畫の起源とその本質、三、支那花鳥畫の發生成立に就いてが答を提出してゐる。その答が正鵠をえてゐるか否かは別問題としてとにかく著者はそういつてゐる。

この書物は著者の言葉に係らず、讀者には支那繪畫史概説とか講話とかの書題に改めて、叙述を簡明に作り直してほしいと望ませる。この著者には論理的な推論が缺けてゐる代りに、詩人的な平明な言ひ廻しがすぐれてゐると思はれるので、概説的叙述の方が適してゐるを私は見る。また本書中には餘りにも重復が目立つて、よほど暇な人でなければ、その重復を讀まされる根氣はないからして、叙述を簡明に作り直してほしいと私はいふのである。最初の六つの章は(一)、支那山水畫の起源

とその本質 二、俯瞰法の研究 三、支那花鳥畫の發生成立に就いて 四、南畫起源の新研究 五、繪因果經樣式試論 六、支那水墨畫の發生成立に就いて 七、古代から唐代にかけての議論がなされてゐる。これらは特殊論文の形、つまり研究の形をとつてゐるが、九、元代繪畫の考察 十、明清の繪畫に就いての二章は概説にほかならなく、前の六つの章の體裁とすこぶる遊離してゐる。

概説をなして一般知識人の教養に資する目的ならば、叙述は平明とする必要がある。研究とは目的を異にするのであるから、徒らに引用文や出典などに神經質となる必要なく、大づかみに著者の見識を根基として叙べてゆくのが通常である。私は概説といふことを斯く理解し、この著者の叙述が概説とか講話とかの書名にふさはしく、研究といふ名には當らないかと印象させられたわけである。

支那繪畫史の概説書としてみると、この著書はその見識の點でどうであらうか。序文でみるやうに著者は佛畫を無視し、山水畫を宗教畫だといつてゐるが、それはもちろん宗教性の横溢した繪畫といふことを誇張した言だとしても、本書を一貫して山水畫のそのやうな宗教性を闡明にした論文は見當らない。私は山水畫を宗教畫だとは思はないし、疊々それだけに宗教性を認めることはできない。宗教性といつたところで漢民族の民族精神に基づく宗教性といふことを、先づ明確にしなければならぬし、それが古代から近世まで一貫し不動であるかどうかをも見

種はめねばならない。儒道佛の三教が思想史上、儼然と存在する以上、それと著者のいふ宗教とがどんな關係にあるかは本書でどこにも論ぜられてゐない。

これは一事にすぎないが、この著者は獨斷家であつて、研究者であるよりは、詩人であるかも知れないと思はれる。

次に研究書としてのこの著書の價值如何である。一例を八唐末五代に於ける西蜀の繪畫の章にとる。これば今日の四川省の地、殊に成都に唐末五代に於て如何に見事な畫境が成立してゐたかといふ支那繪畫史上ではきはめて興味の高い問題に答へようと意圖したのである。一體に東西南北に宏大な地域を占めてゐる支那大陸に於て、いままで餘りにもその歴史が二元的に中華的にみられ過ぎたと思ふ。この著者は地域的なそれだけの特殊性を支那繪畫史のうちに見出そうとする意圖がある。成功不成功は別としても、七歴代支那畫人の出生地に就いての章のこゝとを問題として取りあげてゐることや、支那繪畫史地圖を巻末に附し、亦る努力と方向とは認めねばならない。たゞ、その努力が研究論文として結實してゐないと考へざるを得ない。

この時代の蜀に關係する畫家をしらべるには少くとも黃休復の益州名畫錄と郭若虛の圖畫見聞誌とをみるのが常道である。ところが下店氏は益州名畫錄についてはその存在すら知らないのか、また特に理由があつての上かどうかが、とにかく一言も叙べてゐない。これはこの論文の價值にとつて誰しも疑ふ第一である。少くとも益州名畫錄を最初に取り上げて、それを如何に

生かすべきかに儼り、表記の研究題目に對する解答は方針が定まるのである。

著者が益州名畫錄を参照せず、圖畫見聞誌のみによつたために、且落した畫家に唐の吳道玄の弟子である盧楞伽がある。だが圖畫見聞誌の利用法さへ十分だつたといはれない。この文獻でみると蜀地に於ける唐末畫家の數は二十一人であつて著者はこの文獻(卷二の文)を盲目的に轉寫してゐる。即ち不用意にもその二五七頁に「以下試みにこれ(唐末の作家)を掲げてみる。唐末、二十七人」と記してゐるが、圖畫見聞誌卷二が唐末二十七人と記載するのは蜀の畫家十一人のほか、蜀地以外の畫家なる胡環、胡虔、荆浩、尹繼昭、張贊、王洙の六人を加へて二十七人となるからである。しつこいやうだが著者が唐末二十七人と記すのは單に誤植とだけみるわけにゆかないわけは、次のことから推測できよう。これに續く本書の叙述は或は圖畫見聞誌の列傳風な記載を原文のまま引いてゐたり、或は原文を省いて讀みくだしてみたり、全文を引くかと思ふと勝手なところをはし折つたりする。また何故か五代の蜀人丘文播と丘文曉の記載を省いたりするやうに著者の叙述には誠實さがなく讀者の未知につけこむ傲慢さがある。

従つて、著者の文だけみて、圖畫見聞誌に記された蜀の畫家の記事がこれで全部だと讀者に誤解させる危険が多く、そうなれば、この論文は圖畫見聞誌を正しく讀者に紹介したことにもならない。著者は「序にかへて」のなかで「いつまでも支那繪

畫史が列傳的記述に安住すべきではないとおもふ。」と揚言してゐるに係らず、これでは列傳風な支那の文獻以上に出ず、紹介が不満足とあればむしろ列傳以下ではないか。

しかし考へてみると著者が圖畫見聞史だけに依據し、しかもこの記事をさへ詳細に活用しないといふことは、著者が支那繪畫史を研究するのに支那の文獻に對する輕視といふ底意を知らずに露呈してゐるのかも知れない。文獻を輕視し、自らの直觀力に強い自信をもつてゐるのであらう。

もちろん、繪畫史家が畫に對して直觀力をもつべきは當然であり、文獻の近視眼的研究よりも作品についての直觀的把握の大切なるはいふまでもない。ところで蜀の地の畫家の作品としてなにを著者は豫想してゐるか分らないが、本書の挿圖には四圖（禪月、石恪、刁光胤、黃筌）を掲げるにとゞまる。「唐末五代に於ける蜀地の繪畫は一貫してリアリズムの昂進に新展開を示したのであつた」と結論する著者の見解は、どの作家どれだけの作品に基づけて立論したものか了解に苦しむのである。繪畫史研究であるかぎりには、そして假りにリアリズムといふ概念がでてくる以上は、作品、作家を讀者に十分知らせてほしいのである。

私はいまこの著者が自らの直觀力に強い自信を有し、むしろ支那の文獻は輕視してゐるのでないかと推測したのであつた。しかし、本書のなかではかなり多くの個所で著者は少數ながら文獻を引用し、それによつて立論し、敘述をすゝめてゐるのに

出會ふ。例へば歴代名畫記などは六支那水墨畫の發生成立に就いての章でしよつちゆう引用されてゐる。たゞ文獻の引用は文獻の批判といふことの上に立論されて始めて研究といふに値するといふべきである。歴代名畫記のみならず、支那繪畫史文獻は今日までなにつ嚴しい原典批判がなされてゐないので、學者たちはみな危い常識論の上に文獻を用ひてゐるのであるが、この著者もその轍を踏んでゐる。

繪畫史の研究にとつて、今日最も緊要なことは、いままでの常識論を脱却して、嚴しい資料批判からやりなほすことであり、問題を氣のきいた斬新めいた言葉の綾で解決したやうにみせることではないのである。現代人のもつてゐる常識や直觀力などといふものはせいせい底の知れたものであつて、ひろく複雑な支那的世界を解剖するメスとしては弱いものである。いまは見ることも出来ない支那史上の藝術や文化や大陸の風土上の多様な自然やを現代人の狭い常識や直觀力で、どれだけ理解し能ふか疑はしいのである。藝術にはいろいろの因素が混りこんでゐるので、それらを正視するには、史家の眼識もよほど深刻なもので、なければならぬ。

本書は巻頭に百五葉のオート紙圖版と四葉の原色版とがあり、それには一々著者の解説と本文参照頁とが記してあるのは便利である。支那畫の常識はこれらの圖版によつて或る點まで得られる。この書籍が概説書の體裁を呈するのは、まさしくその圖版の部分の巨量なのに依存する。今日の非常時局として菊

版程度の概説書にこれほどの巨量な圖版は豪華といつて良いであらう。

しかし私としてはこれらのものが既刊の諸圖録より引いた複寫々眞であることを知つてゐるからには、その取捨及び掲載について今一步慎重を期してほしかつたと思ふ。支那畫は我が國に於て多くの青年の魅力から遠い存在である。それは眞價の知られてゐないといふこと、優秀な複寫圖録が少くて、彼らの手に入れがたいといふことに、その大きな理由がある。してみれば、比較的手に入りやすい本書ごとき出版では、名品の生き生きとした細部の複寫をこそ讀者に提供すべきであると考へる。

もう一つ附言したいのは、支那の畫家の人名は未だわが國では殆ど熟知されてゐないのである。西歐畫家の人名の知られてゐる程度に比して、それは話にならないほどである。従つて本書のごとき古代より明清までに互つて敘述をすゝめた著書には、當然索引の項でその所載畫家人名の整頓をなし、以て讀者に便をはかる必要がある。そこまでやつてこそ學問報國であり、學者の責務である。

要するに、概説書としても研究論著としても、著者の「序にかへて」の告白の高邁な意圖に反して、本書の内容は未熟きはまり、學界に對しては支那繪畫史といふ課題が一層混沌化させられるだけで、一つとしてこの著者によつて解決されたことななく、他方現代の東洋美術界に緊要なる藝術復興といふ創造面にとつては徒らに灰色の言説が舊來の常識から一步もすゝまない

に並べられてゐる云といはねばならない。(長廣敏雄)

支那神話傳説の研究

出 石 誠 彦 著

本書は此の方面の研究に一生を捧げられた著者の生前に發表せられた論文二十二篇を収録したものである。著者が我が東洋史學界の此の方面の研究の先達として如何なる地歩を占めて居られたかは人のよく知る處であり、白鳥津田兩博士指導の下、東洋文庫の學問的雰圍氣の中にあつて終始一貫孜々として此の方面の開拓に努められた二十年の成果が、即ち此處に收められた「上代支那の日と月との説話について」(昭和二年九月)以來、「殷初史傳の批判」(昭和十六年十月)に至る迄の一聯の大きな業績となつたのである。最近の學界に於ける文化人類學、神話學、民俗學の盛行は正に偉觀であり、夥しい著述が出版界を賑はしてあり、際物的な、いかがはしいものも少くない中にあつて今、最も顧みられること少く且つ至難な支那神話傳説の研究に於て然も本書の如き性質の書の公刊を見たことは尊く意義あることと信ぜらるる。

擬て本書の論文收載の順序はその發表年月の次に従つてゐるが、最初の「上代支那に於ける神話及び説話」(昭和九年六月、岩波講座「東洋思潮」)のみは總論的内容をもつもの故特に編者が考慮の上、年次の順に依らず巻頭に掲出したものであるから、著者の支那神話説話學の概要を知るには最も恰好のものである。本篇「まへがき」及び序説に於て著者はその支那神話説話